

日蓮大聖人御書全集

なんじょうどのごへんじ

南条殿御返事

ほうみようにんき こと

（法妙人貴の事）

新版
1923
〜
1920

なんじようどのごへんじ ほうみようにんき こと

南条殿御返事（法妙人貴の事）

こうあん ねん がつ にち さい なんじようときみつ

弘安4年（'81）9月11日 60歳 南条時光

しおいちだ だいずひとたわら 鶏冠 菜ひとふくろ さけひとつつ た そうろう

塩一駄・大豆一俵・とつさか一袋・酒一筒、給び候。

こうずけのくに ごきたくそうろうのち げんざん い そうろう

上野国より御帰宅候後は、いまだ見参に入らず候。

ぞん そうら しなじな もの と そ そうら

ゆかしく存じ候いしところに、品々の物ども取り副え候

おんおとづれ あず そうろう もう っ がた おんこころざし

いて御音信に預かり候こと、申し尽くし難き御志にて

そうろう

候。

いまもう ことあたらし あいに そうら とくしようどうじ ほとけ

今申せば事新しきに相似て候えども、徳勝童子は、仏

つち もちい たてまつ あいくだいおう う なんえんぶだい だいたい

に土の餅を奉って、阿育大王と生まれて南閻浮提を大体

ちぎよう

うけたまわ

そうろう

つち

もちい

もの

ほとけ

知行すと承り候。土の餅は物ならねども、仏のいみ

たま

むく

え

じくわたらせ給えば、かくいみじき報いを得たり。しかる

しやかぶつ

われ

むりよう

ちんぼう

おくごう

あいだくよう

に、釈迦仏は「我を無量の珍宝をもつて億劫の間供養せん

まつだい

ほけきよう

ぎようじや

いちにち

くよう

くどく

よりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德

ひやくせんまんおくばいす

と

たま

そうろう

は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候に、

ほけきよう

ぎようじや

こころ

い

すうねんくよう

たま

あ

がた

法華經の行者を心に入れて数年供養し給うこと、有り難

おんこころざし

きんげん

さだ

ごしよう

りようぜんじようど

き御志かな。金言のごとくんば、定めて後生は靈山浄土

う

たま

かほう

に生まれ給うべし。いみじき果報なるかな。

うえ

ところ

じんりん

はな

さんちゆう

とうざいなんぼく

その上、この処は人倫を離れたる山中なり。東西南北を

さ こと

ふところほそ ゆうくつ

きようしゅ

去つて里もなし。かかるいと心細き幽窟なれども、教主

しやくそん いちだいじ ひほう りようじゅせん そうでん にちれん にくだん

釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団

きようちゆう ひ かく たも にちれん むね あいだ

の胸中に秘して隠し持てり。されば、日蓮が胸の間は

しよぶつにゆうじよう ところ した うえ てんぼうりん ところ のど たんじよう

諸仏入定の処なり。舌の上は転法輪の所、喉は誕生の

ところ こうちゆう しょうかく みぎり ふ しぎ ほけきよう

処、口中は正覚の砌なるべし。かかる不思議なる法華經

ぎようじや じゅうしよ りようざんじようど おと

の行者の住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。

ほうみよう ゆえ にんたつと へんたつと ゆえ ところたつと

「法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊し」と

もう じんりきほん い りんちゆう

申すはこれなり。神力品に云わく「もしは林中においても、

じゆ もと そうぼう

もしは樹の下においても、もしは僧坊においても乃至般

ないしはつ

ねはん

うんぬん

みぎり

のぞ

やから

むし

ざいしよう

涅槃したもう」云々。この砌に望まん輩は、無始の罪障

しょうめつ

さんごう

あくてん

さんどく

じよう

か

たちまちに消滅し、三業の悪転じて三徳を成ぜん。彼の

ちゆうてんじく

むねうち

のぞ

のうしや

しんちゆう

ねつき

じよゆ

中天竺の無熱池に臨みし悩者が、心中の熱氣を除愈して

がん

じゆうまん

しょうりよう

いけ

嘯

「その願を充滿すること、清涼の池のごとし」とうそぶ

かれ

こと

ごころ

か

きしも、彼これ異なりといえども、その意はいかでか替わ

るべき。

か

がつし

りようじゆせん

ほんちよう

みのぶ

みね

さんけいはる

彼の月氏の靈鷲山は、本朝この身延の嶺なり。参詣遙か

ちゆうぜつ

きゆうきゆう

らいりん

くわだ

たも

い

に中絶せり。急々に來臨を企つべし。これにて待ち入つ

そうろう

もう

尽

おんごころざし

て候べし。あわれ、あわれ、申しつくしがたき御志か

おんこころざし

な、御志かな。

こうあんしねんくがつじゅういちにち

弘安四年九月十一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

なんじようどのごへんじ

南条殿御返事

おんつか

もう

そうろう

うけたまわ

そうろう

しよろうなんぎ

由

御使いの申し候を承り候。この所勞難儀のよし、

き

そうろう

りようじ

そうら

ごさんけい

聞こえ候。いそぎ療治をいたされ候いて御参詣あるべく

そうろう

候。